

# 20世紀後半の日本人の世論の変動

統計数理研究所名誉所員 西平重喜



善 隣

今日は「日本人の国民性調査」についてお話します。敗戦の時私は北大理学部数学科の1年目の試験がすんだ頃だった。戦後は統計が重視されるだろうと、10月の新学期から選択科目の「確率論・統計学」が開講され、統計学の数学的な基礎の勉強ができた。その頃毎日新聞は「世論調査なるもの」を10月に実施している。朝日新聞も準備を始めた。世論調査は占領軍にいわれて始めたわけではない。1947年9月に大学を卒業して、1年後に言語調査の仕事のアルバイトをし、さらに1年後に統計数理研究所の助手に採用され、社会統計への応用の部へ所属した。

私たちはサンプリングや集計を期待されたが、調査全般にかかわった。私は特

にフィールド・ワークの重要性に関心を持った。

当時はサンプルの家を訪ねて、「世論調査でうかがいました」といっても、「世論調査ってなんだ?」「警察から来たのか?」「税務所にいうな!」という状況だった。

世論調査では誰に対しても調査票に書いてある通りに質問をしなければならぬ。「あなたは、このことについて、どうお考えですか?」と質問するわけだが、当時25歳ぐらいの私が、40、50歳ぐらいの人に「あなたは」なんて生意気な聞き方をするのは大変心苦しかった。

質問を作る人たちの大部分はフィールド・ワークをしたことがないから、調査員に対する説明書にクドクド書く。調査

員の方は現場では、あがってしまっただけで、すっかり忘れていて、思い出しでも調査の途中で、説明書を取り出すわけにはいかない。そんな説明書は「調査員にこう説明した」という言い訳にすぎない。

こんな例もある。「生まれかわるとしたら、どこの国の人になりたいか?」という質問もしたことがある。そうすると「日本」が大変多い。その結果をみて、「日本人の愛国心は変わらない」と喜ぶ。しかしその理由を質問すると「だって英語はできない」というような答えが多い。また例えば「あなたは道徳教育に、賛成ですかそれとも反対ですか?」という質問をして、その答えに従って「なぜ賛成ですか?」と聞くと、サンプルの多くがあわてて「賛成といったが、戦前の

ような極端なこと教えるのは問題ですね」とか、「反対と答えたが、今のうちに……だとかまりますから」などと答える人が多い。

## 1、日本人の国民性調査の準備

1953年ごろは、私たちは調査ができるような研究費もほとんどなく、他の人たちの調査を手伝う形で研究をしてきた。それで、林知己夫さんなどと「自前の調査」をしたいと話合っていた。そのころ「戦後の虚脱から脱け出した」というような時代だったから、「日本人のものの考え方」を調べよう、「日本人の国民性調査」ということになった。

このような調査は当然アメリカなどでやられていると思い、戦争中、直後のアメリカやヨーロッパの調査データ集を見たり、心理学の池内一さんや安田三郎君たちにも相談した。しかし日本人と直接比較できる質問は一つも見つからなかった。

それでも質問を作るヒントをたくさん学んだ。サーストンの「宗教心の点数スケールを作る調査」には、世間や本に宗教心について書かれていることをカードにとり、それをもとにして質問を作った

と書いてあった。

私たちは日本人について論じられている本など37冊から、約3000枚のカードに書き抜き、それを片っ端から質問の形にしてみた。もちろん質問にできないもの、同じ趣旨のものがあつた。そして100問余りの質問を用意し、90問ほどのランダム・サンプルにプリテストをした。その結果を見ながら全国調査の質問にした。

こういう慎重な質問作りの他に、同じ趣旨を質問文の形を変えて検討したり、質問の趣旨がサンプルにきちんと伝わるかどうか（質問の理解度調査）、1年後に同じサンプルを再調査して、前後の答えが一致するかどうか（パネル調査）など各種の吟味調査を、毎年のように繰り返した。

そのパネル調査を見ると、前後の答えが賛成・反対が入れ換わる質問もかなりある。したがって個人の答えは信頼できるとはいえない。ところがそういう質問でも前の調査でたとえば賛成が60%なら、後の調査でもほぼ60%が賛成と答えることが分かった。すなわち世論調査では個人の答えは信頼性を欠くことがあるが、世論としての全体のデータは信頼で

きる。しかも信頼性を欠く質問の性質も分かるので、そのような質問は避けるノウハウが分かった。

このような準備や吟味をしている調査が他にあるかどうか知らない。ただし私たちが完全十分に検討をしているわけではない。しかも数学出身者ばかり、1人言語学者、だった。

欧米の世論調査はほとんどが、政治や社会問題に対する賛否を調べるものだった。欧米では世論調査は社会学者たちによって開発された。しかし日本では私たち数学の教育を受けた者は世論とは何か、意識と態度とはどう違うかなどはおかまいなしで、調査をしていた。だから欧米に参考になる質問はない。そうした日本では私たち数学屋のリーダーシップで世論調査や社会調査が普及してしまつた。

## 2、日本人の国民性調査の質問の例

これからの話で利用する調査の概要を述べておく。

●「日本人の国民性調査」統計数理研究所

20歳以上、1953年に始め5年毎に2013年に（13回目を実施）

●「日本人の意識調査」 NHK放送文  
化研究所

20歳以上、1973年から5年毎  
継続中

私の今日の話に関係がある参照文献は  
次の通り。

●『世論調査による同時代史』ブレイン  
出版、1987年

●『輿論研究と世論調査』新曜社、岡田  
直之他と共著、2007年

●『世論をさがし求めて』ミネルヴァ書  
房、2009年

まず日本人の国民性調査ではどんな質  
問をしたか、特に1953年頃にどんな  
ことを考えて、質問を作ったかを伝えたい  
と思う。その大部分は封建的と革新的  
な考え、戦前の古い意見と戦後の新しい  
意見のどちらを選ぶかということにし  
た。例えば問Aや問Dのように、誰にで  
も理解できる場面で、2つの対立する意  
見のどちらを選択するか、サンプルを追  
い込む形の質問を大分作った。

問A ある会社に次のような2人の課長  
がいます。もしあなたが使われるとし  
たら、どちらの課長に使われるほうが  
よいと思われますか。どちらか1つを

あげてください。

答1 規則をまげてまで、無理な仕事を  
させることはありませんが、仕事以外  
のことでは人のめんどろを見ません。

答2 時には規則をまげて、無理な仕事  
をさせますが、仕事のこと以外でも人  
のめんどろをよく見ます。

問B 宗教についてお聞きしたいのです  
が。たとえば、あなたは、何か信仰と  
か信心をもっていますか？

問C 人のくらし方には、いろいろある  
でしょうが、つぎにあげるものうち  
で、どれが一番、あなた自身の気持ちに  
近いものですか？（6つのくらし方を  
示した）

答3 金や名誉を考えずに、自分の趣味  
にあったくらし方をすること。

問D 子どもがないときは、たとえ血の  
つながりがない他人の子どもでも、養  
子にもらって家をつがせたほうがよい  
と思いますか、それとも、つがせる必  
要はないと思いますか？

答1 つがせたほうがよい。  
答2 つがせないでもよい、意味がない。

### 3、価値観の経年変化

国民性の調査で60年間、13回の調査を

続けている質問は9問しかないから、  
個々の質問について述べるをえない。  
しかしNHKの「日本人の意識調査」が  
1973年から始められているので、そ  
れも一緒にすると、日本人の考えがどう  
いうことについては変化し、どういうこ  
とについては変わらないかをまとめてみ  
ることができる。

ある機会に1973年から2003年  
までの30年間に、7回継続して調査して  
いる国民性とNHKの合計60問について  
検討したことがある。両調査ともその後  
も調査継続しているけれど、この7回20  
世紀の第4四半期のデータとしてみるこ  
とができる。

60問であるが、例えば各質問の「賛  
成」という答えと、「反対」というはっ  
きりした答えの2つの「答」についての  
変化を見る。ただし「よい」と「どちら  
かといえはよい」などは、その合計を1  
つの「答」とした。そうすると214の  
「答」を見ることができた。

この214の「答」の7回の調査の最  
大値と最小値の差（レンジ）に注目す  
る。

私は経験から、世論調査のデータは10  
%未満ならサンプリング誤差範囲かもし  
れない、10〜15%ならサンプリング誤差

か変化したのか不明、15%以上なら変化したということにしている。

●レンジが10%未満Ⅱサンプリング誤差範囲……………131(61%)

●レンジが10%Ⅱ15%Ⅱ誤差か変化か不明……………40(19%)

●レンジが15%以上Ⅱ変化があった……………43(20%)

変化した可能性があるのはレンジが10%以上の83個の「答」である。

その内、単調増加9「答」+単調減少12「答」Ⅱ21「答」が30年で変化したということになる。

#### 4、変化した価値観

○単調増加した価値観(不等号の前の数字は1973年、不等号の後は2003年)

①初めから過半数でさらに増加

〔NHK〕国民の意見は政治に「全く反映していない」+「少しは反映」の計Ⅱ72%Ⅱ86%、14%増。

〔NHK〕夫が台所の手伝いや子守をすることは当然Ⅱ53%Ⅱ86%、33%増(最大増加)

〔NHK〕環境がととのった地域に住んでいるⅡ60%Ⅱ75%、16%増

②増加して半数に迫る

〔NHK〕女性に子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよいⅡ20%Ⅱ49%、28%増

〔NHK〕理想的な家庭Ⅱ父は家庭に気を使い、母は暖い家庭作りに専念するⅡ21%Ⅱ46%、25%増

〔NHK〕婚前交渉を、深く愛し合っているなら認めるⅡ19%Ⅱ44%、25%増

〔NHK〕生活目標は身近な人となごやかにⅡ31%Ⅱ41%、11%増

③少数だが、増加傾向

〔NHK〕親戚づきあいは一応の礼儀を尽くす程度を望むⅡ8%Ⅱ20%、12%増

〔NHK〕夫婦は別姓でもよいⅡ3%Ⅱ13%、10%増

○単調減少した価値観

半数前後から2、3割台へ減少

〔NHK〕婚前交渉は結婚式後まで認めないⅡ58%Ⅱ24%、34%減(最大減少)

〔NHK〕職場では相談、助け合えるつきあいが望ましいⅡ59%Ⅱ38%、21%減

〔NHK〕親戚とは相談したり、助け

合える付き合いを望むⅡ51%Ⅱ32%、19%減

〔NHK〕憲法で表現の自由が義務でなく権利として認められている(多項選択)Ⅱ49%Ⅱ36%、13%減

3、4割台から減少傾向

〔NHK〕新しくできた会社で、労働条件に不満が起きたら、組合を作り活動Ⅱ32%Ⅱ18%、13%減

(国民性)子どもに金は大切と教えることに賛成Ⅱ44%Ⅱ30%、14%減

〔NHK〕環境がととのった地域に住んでいるとは思わないⅡ37%Ⅱ21%、16%減

〔NHK〕憲法で労働組合を作ることが義務ではなく権利として認めているⅡ39%Ⅱ20%、19%減

3、4割台からかなり減少

〔NHK〕中学生の女の子に高校教育まで受けさせたいⅡ42%Ⅱ14%、28%減、この質問では大学までが、22%Ⅱ48%と26%増加しているが、単調増加ではない。

〔NHK〕夫が台所の手伝いや子守をすることに反対Ⅱ38%Ⅱ10%、28%減

〔NHK〕理想的な家庭として、父は仕事、母は委された家庭を守るⅡ39%Ⅱ15%、25%減

〔NHK〕結婚したら、家庭を守ることに専念したほうがよい 35% √ 13%、23%減

○変化(単純増+減)まとめ

単調増加9 「答」のうち、古い意見はなし、7つが新しい意見、いずれも家族・家庭問題

単調減少12 「答」のうち、古い意見は8個で、うちの7つは家族・家庭の問題  
新しい意見 言論の自由、労組の組織を憲法が保障の認識、労働条件解決の組合活動が減少

まとめ 日本人は古い家庭・家族にとられない意見が増加し、政治離れが進行している。

○変化しない価値観

変化しない価値観 7回の調査データ平均が50%超の17 「答」

データは7調査の最小値〜最大値、幅レンジ

(1) コンセンサスがあること 7回とも3 / 4 75%以上の人々がえらんだ 「答」

〔NHK〕日本人に生まれてよかった 90〜96%、幅6%  
〔NHK〕年上の人には敬語や丁寧な

言葉を使うのが当然だ 84〜88%、幅4%

〔NHK〕日本の古い寺や民家を見ると、非常に親しみを感ずる 83〜88%、幅5%

〔NHK〕結婚の仲人に、社会的地位は低いが、結婚する2人をよく知っている 82〜87%、幅5%

〔NHK〕社会生活に、「満足している」+「どちらかといえば満足している」計 77〜87%、幅10%

(2) コンセンサスに準ずること 7回とも6割ないし3 / 4が選んだ 9 「答」略

(3) 半数前後が一致すること 9 「答」略

いわゆる模範解答、「正解」と見える 「答」が高値安定した。

日本の現状の生活について驚くほど、30年間変わらず満足している。

〔NHK〕日本人に生まれてよかった 90〜96%、幅6%  
〔NHK〕年上の人には敬語や丁寧な言葉を使うのが当然だ 84〜88%、幅4%  
〔NHK〕日本の古い寺や民家を見ると、非常に親しみを感ずる 83〜88%、幅5%  
〔NHK〕結婚の仲人に、社会的地位は低いが、結婚する2人をよく知っている 82〜87%、幅5%  
〔NHK〕社会生活に、「満足している」+「どちらかといえば満足している」計 77〜87%、幅10%  
(2) コンセンサスに準ずること 7回とも6割ないし3 / 4が選んだ 9 「答」略  
(3) 半数前後が一致すること 9 「答」略  
いわゆる模範解答、「正解」と見える 「答」が高値安定した。  
日本の現状の生活について驚くほど、30年間変わらず満足している。

調査年	全サンプル	20~	25~	30~	35~	40~	45~	50~	55~	調査年	全サンプル	20~	25~	30~	35~	40~	45~	50~	55~		
		29歳	34歳	39歳	44歳	49歳	54歳	59歳	29歳			34歳	39歳	44歳	49歳	54歳	59歳				
A	1953	85	*85	85	†85	86	88	86	86	B	1953	*	この質問なし								
	1958	77	82	*82	81	†79	76	74	74	71	1958	35	15	*23	29	†35	41	49	51	56	
人	1963	82	86	84	*81	84	†84	83	83	76	宗	1963	31	14	18	*20	29	†40	44	43	46
情	1968	84	87	86	85	*84	84	†84	84	80	教	1968	30	12	18	21	*27	32	†39	47	52
課	1973	81	83	85	83	81	*82	84	†83	83	信	1973	25	9	13	16	20	*27	31	†34	41
長	1978	87	85	87	89	88	90	*90	87	†84	じ	1978	34	18	21	23	26	36	*42	50	†58
	1983	89	90	89	90	95	90	89	*88	87	る	1983	32	15	18	21	27	31	34	*39	52
C	1953	21	*30	28	†25	18	15	14	13	11	D	1953	73	*65	71	†73	74	79	81	83	86
	1958	27	36	*35	29	†22	22	21	19	19		1958	63	55	*80	60	†59	61	67	72	75
趣味	1963	30	41	35	*32	31	†27	22	23	22	養子	1963	51	41	41	*44	47	†51	58	58	66
に	1968	32	46	39	35	*34	33	†26	23	19	に	1968	43	30	33	40	*45	46	†47	48	52
あった	1973	39	51	46	43	40	*38	33	†31	29	つがす	1973	36	24	26	28	33	*37	41	†45	51
暮らし	1978	39	53	49	43	41	36	*35	38	†25		1978	33	18	19	23	28	37	*40	40	†48
	1983	38	49	48	46	41	38	33	*29	27		1983	27	19	17	16	21	26	30	*34	40

\*は1924~1933年生まれは1914~1923年生まれ

\*は1924~1933年生まれは1914~1923年生まれ

表1

### 5、「コホート」(cohort) 分析

私は日本人の国民性調査をもう少し抽象的にまとめた結論のようなものを考えたかと思ってきた。それはコホート(cohort) 分析をすることです。

コホートというのはローマ時代の同年兵ということ(日本では「同期の桜」同じ年の特攻隊の兵士にあたる)。それが人口問題などでよく使われるが概念である。同じ年生まれから、拡張して「大正生まれの人は……」「昭和1桁」「戦後生まれ」「団塊の世代」というのは「大正生まれというコホート」……、「団塊の世代」というコホート」のことである。

表1Aの「人情課長」は質問Aの「答2、時には規則をまげて、無理な仕事をさせますが、仕事のこと以外でも人のめんどろをよく見ます」のことで、1953年調査では全サンプルの85%が答2を選んだ。

1953年の年齢別を右に見ると、20〜29歳のサンプルの85%が「答2、人情課長」、25〜34歳のサンプルは86%、……という結果だった。

次の1958年調査では、全サンプルの77%が「答2、人情課長」で、年齢別

では20〜29歳のサンプルの82%、25〜34歳も82%、……になった。

このデータの傾向をみると、「人情課長」はいつの調査でも8割前後のサンプルが選んでいる。

調査でもどの年齢層でも、ほとんど8割前後のサンプルが「人情課長」です。

これを分かりやすく図1のようにすると、左上の図のように、例えば第1回の年齢別のデータが点線、第2回の年齢別のデータが破線、第3回の年齢別のデータが実線とすると、毎回の年齢別のデータが実線が殆ど重なっている。

「B宗教を信じている」はいつの調査でも、全サン

プルの3割台が選んでいる。しかし毎回20〜29歳のサンプルの1割、25〜34歳では2割近く、というぐあいで、いつの調査でも年長者ほど信者が増える。

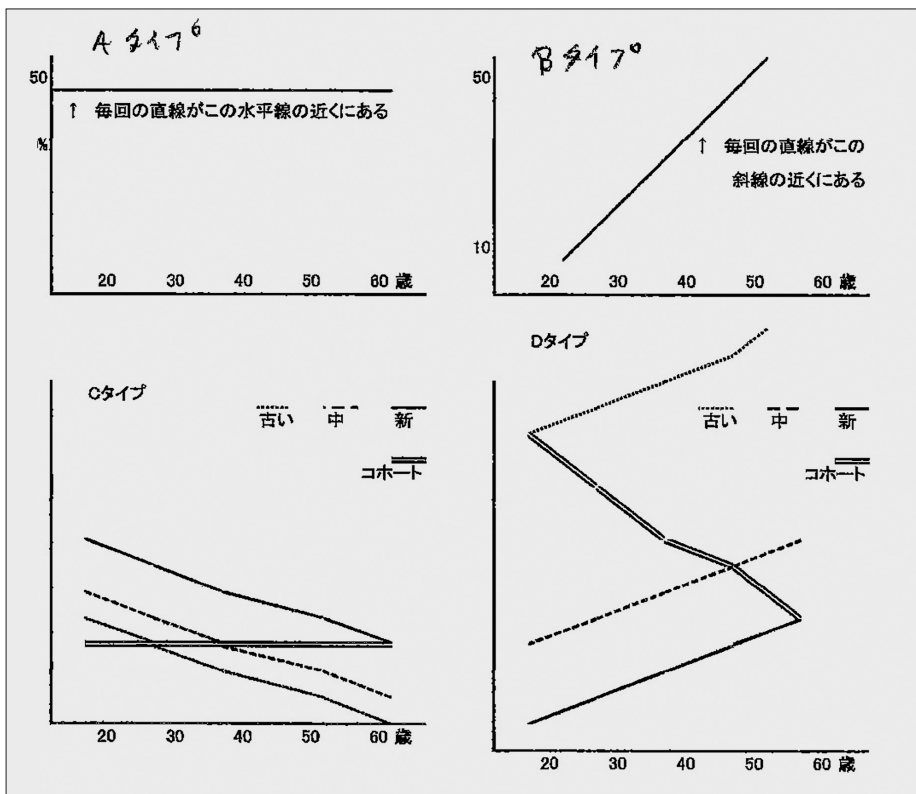


図1

これは図1右上のようなグラフで、  
 つの調査でも年齢別が右上がりだが、毎  
 回のデータはほとんど重なっている。

「C趣味にあった暮らし」は全サン  
 プルでは2割台から4割近くまで増加傾  
 向です。そしていつの調査でも若年層から  
 高年層にかけて、減少傾向である。

図1左下のように、第1回の点線、第  
 2回の破線、第3回の実線はいずれも右  
 下がり。しかし「B信者」と違って、線  
 が重ならず、新しい調査ほどやや高い所  
 がある。

ここでコホートが問題になる。表1の  
 \*印のサンプルは1924〜33年生まれ  
 の人たち（コホート、大正末期から昭和  
 初期生まれの世代の人）。この大正末期  
 から昭和初めの人たちは1953年には  
 20〜29歳で30%が「趣味本意の生活」を  
 望んだ。1958年には彼らは25〜34歳  
 になっていて35%が「趣味」と答えた。  
 5年後の1963年には30〜39歳32  
 %、……というぐあい、1983年  
 は50〜59歳で34%になっている。大正末  
 期から昭和初期生まれの人の3割くらい  
 は死ぬまでこの「趣味」という生活態度  
 を持ち続ける。図に入れれば、30%くら  
 いの高さの水平な2本線(=)のよう  
 になる。

コホート (個人意見)	全体のデータ (国民性)	
	変化しない	変化する
変化しない	A (不変の国民性)	C (世代による変化)
変化する	B (加齢による変化)	D (時世による変化)

コホート cohort は 同じ時期に生まれた人

タイプA: ①永久不変の国民性 (人情課長)

②調査時期にも、被調査者の年齢にも関係なく同じ

③どんなことか特定しがたい、国民の大部分が同意見、あるいは五分五分

タイプB: ①加齢により変化 (宗教を信じている)

②毎回の年齢別データは同じ、年齢が高くなるほど増加(減少)

③基本的な人間感情にもとづくこと

タイプC: ①世代により変化 (清く正しく)

②全体のデータが毎回増加(減少)するが、コホートのデータは同じ

③日常生活にかんすること

タイプD: ①時勢により変化(老も若きも意見が変わる) (養子に嗣がせる)

②全体のデータが毎回増加(減少)するが、コホートのデータの値も変化

③旧来の伝統、道徳など

A&Bタイプ: 変わらない国民性、ホンネがでるもの、心情的な判断、教育によって変えにくい。

C&Dタイプ: 変わる国民性、タテマエがでるもの、知識を通して答えること、教育によって変わる。

A&Cタイプ: 変わらない個人の意見、日常生活を背景として考えること。

B&Dタイプ: 変わる個人の意見、日常生活とは直接関係ないこと。

表2

ト \*印は1914〜23年生まれのコホ  
 ート(第1次大戦後生まれ)は幾つになっ  
 ても25%程度で、大正末期から昭和初期

の世代より、「趣味」が少し低い。この  
 世代を図に入れればより低い水平線に  
 なる。

このようなコホートを結ぶ線は、「A人情課長」では図1の中の3つの線と重なる水平線になる。

「B宗教を信じている」は3つの線と重なる右上がりの線と重なる。

「D養子につがせる」は全サンプルでは7割台から2割近くまで減少傾向で、どの調査でも若年層から高年層にかけて、増加傾向である。

図1（右下）で、第1回の点線、第2回の破線、第3回の実線はいずれも右上がり。古い調査は大分高い所にある。表1の\*印のサンプルは1924〜33年生まれの人たち（コホート）の回答率であるが、それを二でつなぐと、65%から40%まで大きく減っている。

実際のデータは図1のようにキレイにはならないが、このような4つのタイプが考えられる。そこでこの調査から次のような4つのタイプの整理ができる。

コホートは同じ時期に生まれた人

タイプA ①永久不変の国民性（人情課長）②調査時期にも、被調査者の年齢にも関係なく同じ ③どんなことか特定したい。国民の大部分が同意見、あるいは五分五分

タイプB ①加齢により変化（宗教を信じている）②毎回の年齢別データは同

じ、年齢が高くなるほど増加（減少）③基本的な人間感情にもとづくこと

タイプC ①世代により変化（清く正しく）②全体のデータが毎回増加（減少）するが、コホートのデータは同じ ③日常生活に関すること

タイプD ①時勢により変化（老も若きも意見が変わる）（養子に嗣がせる）

②全体のデータが毎回増加（減少）するが、コホートのデータの値も変化 ③旧来の伝統、道徳などこのタイプを整理しなおすと、

A & Bタイプ ①変わらない国民性、ホネがでるもの、心情的な判断、教育によって変えにくい。

C & Dタイプ ②変わる国民性、テーマがでるもの、知識を通して答えること、教育によって変わる。

A & Cタイプ ②変わらない個人の意見、日常生活を背景として考えること。

B & Dタイプ ②変わる個人の意見、日常生活とは直接関係ないこと。

しかし国民性の調査では同じ質問が少なすぎる。NHKの調査のデータで試みれば面白いと思うのだが。

それでもこの4タイプでは整理できないデータのほうがたくさんある。それは

データの不足や適切でなかったという言い訳もある。しかしそれは国民性というような、潜在的にあると考えた「日本人のものの考え方」というものは、現代の日本人の日常生活では、あまり重要な説明概念にならないのかもしれない。

なお日本の調査だけでは、日本人だけの国民性が分からない。そのためには国際比較が必要だが、その話を今日はできない。

（2015年5月14日・公開フォーラム）

講師略歴（にしひら しげき）

1924年生まれ。北海道帝国大学理学部数学科卒業。文部省統計数理研究所員、付属統計技術員養成所長。現在統計数理研究所名誉所員。

上智大学教授、東京教育大学、早稲田大学、パリ第5大学などで教鞭。世界世論調査協会理事を務めた。

著書『世論調査』岩波新書、吉田洋一との共著、『統計調査法』培風館、『日本の選挙』至誠堂、『世論をさがし求めて』ミネルバ書房ほか多数